

## 第22章 シオニストとポーランド亡命政権のなれあい

ドイツ軍がソ連に侵入したニュースをメナヘム・ベギンはシベリアへ送られる護送列車の車中で聞いた。ベギンは一九三九年の独ソ不可侵条約でソ連側に当てがわれた領域に逃げ込んだ他のポーランド非コミュニスト政治家活動家とともにソヴィエト・ロシア軍に身柄を拘束されたのであった。ポーランド亡命政権とソヴィエトはドイツ軍がソ連に侵入するまでうらみ重なる敵同士であった。しかも独ソ戦が始まって、両国の間には和解しがたい対立が、わけてもポーランド東部領域をめぐる残っていたが、スターリンはポーランド人捕虜すべてに大赦令を出した。ポーランド首相ヴワディスワフ・シコルスキは男子全員に亡命政権の軍に参加するよう命令を発した。

「モーゼの前進信条をもつ人びと」

戦争直前の数カ月間、シオニスト改訂派、なかんずく(当時ポーランド・ベタルのトップだった)ベギンは、ワルシャワ保安警察部長ルンゲ大尉と交渉して、ポーランド人部隊長の指揮下に個々のユダヤ人兵士部隊集団の編制配置をはかるうとした<sup>1)</sup>。改訂派は、これでポーランド人、ユダヤ人の部隊がドイツ軍

を打ち負かした後、ポーランド人指揮官がいなくなっても、パレスティナの征服に向かえるユダヤ人部隊がで<sup>2)</sup>きあがるものと期待した。計画はしかしユダヤ人を隔離することには反対のブンドの敵対的態度のため<sup>3)</sup>に挫折した。一九四一年九／一〇月、ナチス・ドイツ軍がモスクワへ破竹の勢いで進撃していた間に、ソ連のヴォルガ地方で、再びブリト・ハシャヤル(兵士同盟(シオニスト改訂派の退役軍人組織)司令官ミロン・シエスキンおよびワルシャワ・イディッシュユ日刊紙『デア・モーメント』発行人マレク・カハン)によつて同じ提案がなされた。ポーランド亡命政府軍は、ユダヤ人を軍から排除しておきたかつた反セム主義者によつて支配されていたから、ユダヤ人自身によるこうした隔離部隊案は反セム主義者にとつては渡りに船であった。しかし、司令官ヴワディスワフ・アンデルス將軍を<sup>4)</sup>いたたく軍トップ周辺では提案がソ連あるいは英政府に受け入れられないであろうと考えていた。だがサマラ・オブラストの中間準備地域の軍将校たちの中には改訂派の旧同志もおり、ユダヤ人兵士を選んで自らの部隊に編入することで便宜をはかるうと考えていた。戦前歩兵隊学校校長をつとめていたヤン・ガラデユク大佐はそうしかたたちの大隊を指揮しようとして自ら申し出た。戦後カハンは部隊が期待されていたユダヤ人軍団のモデルになったとし、しかもこれにポーランドユダヤ関係の成功事例としてのポジティブな像を与えている。しかしイスラエル・グートマンはアンデルスの亡命政府軍の歴史を調べ、カハンの言は信用しないようにと述べている<sup>4)</sup>。ラビで反シオニズム正統派組織アグダト・イスラエルの一員ながらユダヤ人軍団構想の支持者だったレオン・ローゼンチエシヤカツチュが書いた『クライ・イン・ザ・ウィルダネス(荒野の呼び声)』のほ

うに真実が述べられている。  
一九四一年一〇月七日、トロツコイエであらゆるユダヤ人に召集がかけられ、ひとりの将校は「モーゼの前進信条をもつ人びと」の召集を命じた。それに応じた人びとのほとんどは突然軍から除籍された。た

だちに除籍放免されなかったわずかのユダヤ人はローゼン<sup>⑤</sup>・チェシャカツチュを含め、軍残存部隊から全面的に切り離されてしまった。ただちに野蛮な扱いが始まった。ユダヤ人の大多数に支給された靴はいずれも小さすぎ、マイナス四〇度にもなるソヴィエトの冬を結局ほろで覆って凍<sup>⑥</sup>ごうとつとめざるをえなかった。別の野営地へ輸送されたユダヤ人は何日もぶつとおしで戦場にほうっておかれ、軍は彼らの給養を「忘れ」たのであった。軍司令部に従軍牧師に任じられたローゼン<sup>⑤</sup>・チェシャカツチュがコルトウバンカの大隊の新しい野営地に到着した時に最初にやらねばならなかった仕事は大変な数の死体の埋葬をはじめることであった。大変な苦しみと死の犠牲を払った後でようやくユダヤ人兵士の惨状を伝える言葉として生きた情報がポーランド大使と亡命ブンド・リーダーたちの耳に達し、大隊は身なりもきちんと整った部隊に変わったが、ユダヤ軍団のための大計画は消えてしまった。

アンデルスの軍隊は最終的にソ連をあとにしてイランに向かい、そこで英軍によりやく合流した。反セム主義者はできるだけ多くのユダヤ人を残していこうとし、健康な青年がわけても軍務志願を拒否された。一九四二年三／四月、八／九月に約一萬四千人の移送がおこなわれたが、そのうち約六千人がユダヤ人で、兵士の五パーセント、非戦闘員の七パーセントを占めていた。これを視野に入れると、一九四一年夏、まだ反セム主義の補充原則がおしつけられる前だったが、ユダヤ人は軍に召集された兵の約四〇パーセントを構成していたのである。ユダヤ人部隊に対する差別が存在したにもかかわらず、シオニスト改訂派カハン、シエスキ、ベギンらは彼らの軍事的コネクションにわたりをつけることができた。

#### ポーランド軍内でのシオニストによる反セム主義の受け入れ

第二次世界大戦の数あるアイロニーのなかのひとつは、ポーランド亡命政府軍が反セム主義の大部隊をかかえながら最終的にはパレスティナに到達して喜んだことであろう。一九四三年六月二八日、当時ハガナの新聞『エシュナブ』を発行していたエリアゼル・リーベンシュタイン（リヴネ）は、アンデルス将軍が一九四一年にすでに発していた極秘指令を紙面に出した。彼は将校たちに、ユダヤ人に対する敵対感情を「全く理解できる」が、連合国がユダヤ人の圧力下にあることも将校たちは了解しておかねばならないと述べた。しかし、将校たちが故郷へ戻ることになると、「我々は自らの郷土の規模と独立性に合わせてユダヤ人問題を取り扱うつもりである」と再度リーベンシュタインは確認している。これはヒトラーの爪から逃れられたようなユダヤ人はすべて軍から排除することをほのめかしているのだと受けとってもらいたいと言っているように理解された。パレスティナにポーランド軍がいたことは、世界シオニスト機構がかかるスキヤンダルを無視することを不可能にした。そして九月一九日、最終的に「ポーランド・ユダヤ人代表」がテル・アヴィヴのポーランド領事邸でこの極秘指令をアンデルス将軍につきつけた。将軍は事柄すべてがでっちあげであると声明した。さらにパレスティナ駐屯中の軍からのユダヤ人兵士脱営についても触れ、ユダヤ人兵士には、部隊にいる四千名のユダヤ人兵士中三千名が脱営中であるが、搜索追及するつもりはなく不問に附す旨伝えたため、シオニストのほうはピンときた。会談後まもなくポーランド領事は在ロンドン・ポーランド外務省に彼の代理とイツハク・グリユンバウムとの間でおこなわれたユダヤ機関執行部に関するいまひとつの会談の覚え書きを送付した。領事代理は指令がでっちあげである、と繰り返し、シオニストに全問題をこれ以上荒立てないよう要請した。事態について執行部の他のメンバーと

話し合った後、グリウンバウムはポーランド側の收拾の仕方に同意することを認め<sup>(10)</sup>た。後に、一九四四年一月一三日、ロンドンのポーランド国民評議会におけるシオニスト代表イグナシイ・シュヴァルツバルト博士と世界ユダヤ人会議アリエ・タルタコウアーが、シコルスキの後を襲って亡命政権首相になった農民党政治家スタニスワフ・ミコワイチクと再度会談し、アンデルス將軍の指令がでつちあげであることに同意した。シュヴァルツバルトはミコワイチクに、

亡命政権の大臣の中には指令が嘘でないという証人がいます。問題になった指令に閣議で反対した大臣がいるのが何よりの証拠です。外電の中には指令がでつちあげであるとして知っているものも知っています。対外消費用としてそういう主張をする分には別に異議ありません。しかし内部的には、それがでつちあげだとまさか私が信じているなどは期待しないでいただきたいと思ひます、と語つた。

イギリスにおいてさえユダヤ人兵士は、戦闘に入れば背後から撃たれるぞと部隊指揮官よりいわれられており、ポーランド将校も戦争が済めばユダヤ人の強制移送がおこなわれると繰り返し言明した。中には、ヒトラーの支配の後生き残つたユダヤ人もいつべんに殺られるぞと素っ気なく述べる将校もいた。一九四四年一月、ユダヤ人たちにとってはもう耐えられない状態になっていた。六八名が脱走し、ハンガー・ストライキ、さらには自殺までしかねない状態であった。英軍の中で闘うことに異論はなかつたが、ポーランド軍部隊から離れないのは耐え難かつた。二月にはさらに一三四名、三月にはもっと多くの兵士が脱營した。ポーランド軍の反応は最初はただユダヤ人兵士をなすがままに脱營させておくという態度であつたが、最後には三一名を軍法会議にかけると言明し、これ以上転属は認めないとしたのであつた。英勞

働党の中にはユダヤ人兵士を支援する党员もあり、トム・ドライバークは問題を下院の討議に附すべく動議を提出した。ところがドライバークが提案するとすぐシュヴァルツバルトが電話を入れ、人びとの関心を惹かないよう動議を引つ込めてくれるよう頼んだ<sup>(11)</sup>。ドライバークはこれを無視、マイケル・フットとともに二人で五月一四日の大衆集會の場において開廷予定の軍法會議を非難した。またダウニング街ではデモもおこなわれた。ポーランド亡命政権は措置撤回を強いられた。すなわち訴追をとり下げざるをえなかつた。数年後『ルーリング・パッションズ』という回顧録の中でドライバークはこの問題に触れ、指導的英國ユダヤ人のまぢがつた行動様式にあきれている。

我々がイギリスのユダヤ教徒共同体の公式スポークスマンの忠言——というよりもお涙頂戴式の嘆願——にさからつて問題を議會で検討した結果おかしな事になつた。ユダヤ人たちはこの問題が公けになれば反セム主義がさらに強まってひよつとしたら自分たちにまでとばつちりがくるとおそれていたのである<sup>(12)</sup>。

ドライバークによる英國ユダヤ人指導者の動機についてのこういつた解釈は明らかに的を得ていた。指導者たちも最後は隠せず話せるようになったが、それも労働党のメンバーが公衆に訴えかけ、また自ら問題を公けにしても大丈夫だと絶対確信しえてはじめて可能になつたのであつた。

シュヴァルツバルトはそれより前にポーランド・ユダヤ人にかかわる問題で、むしろ恥ずべき別の問題に關与していた。一九四二年エンデツィア(第二〇章参照)のゾフィア・ザレスカは亡命セイム(ポーランド議會)に対し、ポーランドの外でユダヤ人の郷土建設がなされるべきで、ユダヤ人にも出国を要請すべき

であると提案していた。シュヴァルツバルトはこれに反対せず、むしろ決議案を特にパレスティナ指定郷土案に修正しようとした。「ところが」彼の提案はセイムによって容れられず、原案が通った。ブンドのシムエル・ツイゲルボイムとポーランド社会党の代議員一名だけがこれに反対し、シュヴァルツバルトは棄権したのであった。

ポーランド亡命政権はイギリスが頼りであり、ポーランド軍のパレスティナ到着後、シオニストはいっそうイギリスに圧力をかけたはずである。アンデルス將軍は將校たちに、ユダヤ人はポーランド軍部隊の中の反セム主義問題に関してはつねに与圧しうる能力をもっていると語ったが、それは当たっていた。一九四四年のドライバークフットの介入の成功はこうした場合何をなしうるかを示している。これに対してパレスティナおよびロンドンの世界シオニスト機構はアンデルス將軍の日々の命令を隠蔽しようとしてポーランド政府と衝突し、労働党メンバーに抗議を取り下げさせるべく説得しようとして介入した。同様に改訂派シオニストはパレスティナ征服に役立つユダヤ軍団のため、なおソ連駐留時のポーランド軍と通じていた。一九四三年には彼らのよき友ガラデユク大佐がパレスティナへイルグンを列車で送るのを助けた<sup>(15)</sup>。戦前にポーランド反セム主義者の後援を求めていた人びとはポーランドの反セム主義とは闘わず、こうした態度は自分たちに地の利のあったイギリスでもパレスティナでもかわらなかつたのであった。

## 第23章 非合法入国

第二次世界大戦前および大戦中、非合法にパレスティナへ入ってきた人がどのくらいいたのか厳密な数は判明していない。イエフダ・バウアーは一九三六〜三九年の間に約一万五千人にのぼると踏んでいる<sup>(1)</sup>。彼はこれを分析して改訂派の船が五三〇〇、労働シオニストが五〇〇〇、他の個別グループによる調達船が五二〇〇、それぞれ運んだと見積もっている。英委任統治政府は大戦が終わる前に到着した人びとを二万一八〇名としている。改訂派オルガナイザーの第一人者ウィリアム・パールはこれを倍視して四万人以上とみている<sup>(3)</sup>。イエフダ・シュルツキイは戦争中パレスティナに到着した人を五万二千人としているが、非合法と合法を合わせたの数である<sup>(4)</sup>。

最初の非合法船ヴェロス号はパレスティナのキブツによって用意され、一九三四年七月に到着している。同年九月にも二回目のころみがなされたが、阻止され、世界シオニスト機構も労働シオニストもそれ以上の続行には反対した。一九三五年までにはイギリスは五万五千人の非合法入国者を認めていたから、さらにもう少しの人数のためにシオニスト多数派はロンドンを敵にまわしてしまふ特別の理由も見つからなかつた。改訂派の第一号はユニオン号で一九三四年八月、上陸中に阻止された。この二つのころみの挫折は、一九三七年の改訂派による再開までは、非合法入国続行を思いとどまらせた。

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著

芝 健介 訳

